

日本における身体抑制に関する看護研究の動向： テキストマイニングを用いた論文表題の分析

小原(武島)弘子¹⁾, 明神拓也²⁾, 木村義孝²⁾, 竹崎久美子³⁾

(2020年9月25日受付, 2020年12月14日受理)

Trends in nursing research on physical restraint in Japan: A text mining analysis

Hiroko Takeshima Kohara¹⁾, Takuya Myoujin²⁾, Yoshitaka Kimura²⁾, Kumiko Takezaki³⁾

(Received : September 25, 2020, Accepted : December 14, 2020)

要 旨

本研究の目的は、日本における身体抑制に関する看護研究の動向を明らかにすることである。医中誌Webに収録されている論文を対象とし、論文表題の傾向や特徴について、テキストマイニングの手法を用いて分析した。結果、日本における身体抑制の看護論文は、2000年から始まる全国的な身体拘束廃止の動きや国の施策が影響し、急激に論文数は増加、研究対象が幼児や小児から高齢者へ移行していたことが明らかとなった。また、2000年を境に、抑制帯の改良・改善や工夫から、看護師の認識および身体抑制を解除あるいは廃止に論文の焦点が変化していることも明らかとなった。

キーワード：看護研究、身体抑制、テキストマイニング、論文表題

Abstract

The purpose of the present study was to elucidate trends in nursing research on physical restraint in Japan. We collected bibliographic information of nursing papers regarding physical restraint that were published between 1982 and 2020 and included in the Japan Medical Abstract Society Ichushi-Web database. We extracted information about the title, affiliation of the lead author, name of the journal of publication, and publication year of the journal for each paper. The text mining method was used for analysis. There were 999 nursing papers on physical restraint published between 1982 and 2020. In particular, the number of papers increased rapidly after 2000. From 2000 onward, research subjects changed from infants and children to elderly individuals. The research topics until 2020 involved improving restraining bands or methods of restraint to perform physical restraint safely for patients. However, from 2000 onward, the approach of nurses changed to the one in which no physical restraint is used for patients, or if physical restraint has to be used, the restraint is removed early. These changes affected nationwide movements and national policies to abolish physical restraint starting from 2000.

Key words : nursing research, physical restraint, text mining, title

1) 高知県立大学看護学部看護学科 講師
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Lecturer
2) 高知県立大学看護学研究科博士前期課程
University of Kochi Graduate School of Nursing
3) 高知県立大学看護学部看護学科 教授
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor

I. はじめに

身体抑制（身体拘束）は、患者の精神的苦痛だけでなく、食欲低下、関節拘縮、褥瘡、心肺機能低下など、患者にさまざまな不利益をもたらす（吉岡・田中、1999）。看護師にとって、このことを理解してはいても、チューブ類の予定外抜去や転倒転落の防止というような、患者の安全確保の技術の一つとして現在も行われている。身体抑制は、「衣類又は綿入り帯等を使用して、一次的に該当患者の身体を拘束し、その運動を抑制する行動の制限をいう」（昭和63年4月8日厚生省告示第129号における身体拘束の定義）とされている。

わが国における身体抑制廃止の取り組みの始まりは、1986年における上川病院での抑制廃止運動であった。これは、上川病院の老人病棟にて、抑制を「縛る」と表現し、抑制帯を捨て、認知症状を有する高齢患者に対し、ケア方法を工夫することで抑制しない看護を実践されたものであった。上川病院での実践成果が新聞報道や看護の専門誌で取り上げられるものの、上川病院以外の施設に身体抑制廃止の取り組みが全国に普及するまでには至らずという背景があった（吉岡・田中、1999）。このような中、2000年4月に施行された介護保険法で身体抑制が原則禁止され、2001年に厚生労働省が「身体拘束ゼロへの手引き」（厚生労働省、2001）を表明し、国の施策として身体抑制廃止の取り組みが始まった。以降、2008年にNPO法人全国抑制廃止研究会が「身体拘束廃止のための標準ケアマニュアル」（NPO法人全国抑制廃止研究会、2008）、2010年に日本集中医療学会看護部会が「ICUにおける身体拘束（抑制）のガイドライン」（日本集中医療学会看護部会、2010）、2015年に日本看護倫理学会が「身体拘束予防ガイドライン」（日本看護倫理学会、2015）というように、ガイドラインが多く出されている。しかし現場では、急性期医療施設を中心に身体抑制がいまだに実施されている。このことから、我々は、身体抑制廃止に向けて、身体抑制に関する看護研究の動向を明らかにし、どのような看護研究に着手すべきかに

ついて考察する必要があると考えた。

本研究の目的は、これまでに発表された日本における身体抑制に関する看護研究の動向を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 対象

1982年から2020年9月5日までに、医中誌Webに収録されている論文を対象とした。医中誌Webとは、医学中央雑誌刊行会が作成・運営しており、国内発刊の医学・歯学・薬学・看護学および定期刊行物、のべ約7500誌から収録した約1,400万件の論文情報を検索できるものである（医学中央雑誌刊行会、2020）。

2. 分析手順

1) 文献情報の収集

身体抑制に関する論文表題において、「身体拘束」や「身体抑制」という用語が用いられていた。医学中央雑誌刊行会（以下医中誌）が作成している医学用語シソーラスでは、「身体抑制」がシソーラスである。本研究では、医中誌Webにおいて、身体抑制（身体抑制/TH or 身体抑制/AL）をキーワードに、原著論文および看護文献を絞り込み条件として検索を実行した。

論文表題、筆頭著者の所属、収録雑誌名、雑誌の発刊年およびシソーラス用語の情報を収集した。先行研究（李他、2017）を参考に、論文表題は次のように取り扱った。英語と日本語の両方の表題がある場合は日本語の表題を採用し、特集の見出しと論文表題がある場合について見出しは分析対象とせず表題のみを対象とした。

3. テキストマイニングを用いた分析

収集した書誌情報をデータとし、Text Mining Studio for Windows Version 6.1.0（NTTデータ数理システム）（以下TMS）を用い、テキストマイニングの手法を用いて分析した。テキストマイニングとは、文章型すなわちテキスト型のデータ

を分析する方法である（樋口、2014）。テキストデータの中から、言葉（キーワード）同士にみられるパターンや規則性をみつけることができる（藤井他、2005）。

論文表題は、テキストデータとして扱われた。筆頭著者の所属、収録雑誌名、雑誌の発刊年およびシソーラス用語の情報は、属性データとして扱われた。

TMSでは、以下の手順で分析を実行した。

- 1) 論文表題のテキストデータについて、意味を持つ最小の言語単位である形態素に分解する形態素解析（TMSでは分かち書き機能）を行った。
- 2) 単語頻度解析を行い、論文表題に頻出している単語を確認した。
- 3) 属性ごとに特徴的な言葉や表現を抽出する特徴分析、単語において係る単語と受ける単語の組み合わせを抽出する係り受け頻度解析を行った。

4. 倫理的配慮

本研究の対象は、研究論文であることから、著作権、剽窃、盗用の点について倫理的な配慮を行った（大木、2013）。

Ⅲ. 結果

1. 対象となった論文の概要

999件の論文が検索された。最も古い論文は、1982年発刊の雑誌に収録されていた。表1は、年代別（4年区切り）の論文数を示す。2000年を境にして、論文数が増加していた。表2は、発表論文が掲載されていた雑誌を示す。「日本精神科看護学術集会誌」が103件、「日本精神科看護学会誌」が92件と多かった。表3は、第1著者が所属している組織を示す。病院所属の臨床看護師が814件（81.5%）とほとんどを占めていた。

2. 論文表題に頻出していた単語

分析対象のテキストデータにおいて、総単語数6740語であった。単語種別では、名詞5706語

（84.7%）、動詞601語（8.9%）、その他（形容詞および形容動詞など）433語（6.4%）であった。

図1は、単語頻度解析による上位20位の頻出単語を示す。単語頻度解析において、「身体抑制」、「身体拘束」、「拘束」、「抑制」と同じ意味の単語があった。これらを「身体抑制（拘束）」として扱われるように設定した。「身体抑制（拘束）」、「看護師」、「患者」、「取り組み」、「看護」が上位5位の頻出単語であった。

3. 論文表題における年代別の特徴語

特徴分析にて指標値を算出し、論文表題における年代別の特徴語を抽出した。特徴分析とは、属性毎にどのような言葉や表現が特徴的であるのかを抽出する。特徴分析では、特徴的な言葉や表現を指標値として定量的に表される。指標値は、属性の分布の異なり具合とその単語の頻度を掛け合わせ、程よいバランスになるような計算式となっている。

表4は、年代別（4年区切り）の特徴語上位10位を示す。指標値が大きいほど特徴的な言葉である。1988年から1999年までは、「工夫」、「抑制帯」、「改善・改良」の言葉が上位に出現した。2000年から2007年までは、「身体抑制廃止」の言葉が上位に出現した。2008年から、「行動制限」や「行動制限最小化」の言葉が出現するが、2016年には出現しなくなり、2012年に出現した「身体抑制解除」の言葉が上位に出現した。

また、対象（人）を表す言葉に着目すると、1995年までは、「幼児」、「小児」および「子ども」の言葉が出現したが以降は出現しなくなった。2004年から2007年まで「高齢者」の言葉が出現したが、以降は出現しなくなった。2016年から「高齢患者」および「認知症患者」の言葉が出現した。

4. 論文表題における係り受け単語

係り受け頻度解析にて、論文表題における名詞と行動を表すような品詞の組み合わせ、名詞とイメージ的な表現を表す品詞の組み合わせを抽出し

た。図2は、頻度の多い係り受け単語上位10位を示す。また、棒グラフ内に、年代別（4年区切り）の分布も示した。「看護師－認識・意識」、「認識・意識－変化」および「身体抑制（拘束）－認識・意識」というように、「認識・意識」との組み合わせが3つあった。これらの原文（表題）を確認すると、「看護師－認識・意識」では、「認知症者の身体拘束に対する看護師の意識 アクションリサーチによる意識変革の過程（竹内他、2020）」、「認識・意識－変化」では、「臨床倫理ガイドライン導入の取り組み：管理者の取り組みと看護管理者・チームの認識や行動の変化（友竹他、2017）」、「身体抑制（拘束）－認識・意識」では、「当院病棟勤務看護師の身体拘束・抑制の認識について（友永・吉本、2019）」などがあった。

年代別に着目すると、「認識・意識」との組み合わせ3つに加え、「身体抑制（拘束）解除（又は解除）－向ける」および「身体抑制（拘束）廃止（又は廃止）－向ける」の組み合わせのほとんどは、2000年以降に掲載された論文で出現していた。これらの原文（表題）を確認すると、「身体抑制（拘束）解除（又は解除）－向ける」では、「身体抑制解除に向けた取組み：リハビリテーション科とのカンファレンス導入の効果（中村他、2018）」、「身体抑制（拘束）廃止（又は廃止）－向ける」では、「医療施設における身体拘束に対する看護師の認識と廃止へ向けた取組み（松井、2014）」などがあった。一方、「抑制帯－工夫」および「抑制帯－改良・改善」の組み合わせがある論文のほとんどは、1999年までに出現していた。これらの原文（表題）を確認すると、「抑制帯－工夫」では、「抑制帯装着患者の看護：患者の安全の確保と苦痛の除去をめざす抑制帯の工夫（江口他、1990）」、「抑制帯－改良・改善」では、「不穏状態の患者に用いる抑制帯の改良：装着容易な分離型抑制帯を作製して（瀬尾他、1994）」などがあった。

5. シソーラス用語「高齢者看護」を持つ論文の論文表題における特徴表現

2004年以降、「高齢者」、「高齢患者」、「認知症患者」の言葉が出現していたことから、医中誌シソーラスである「高齢者看護」を持つ論文（131件）と持たない論文（868件）の論文表題における係り受け単語の特徴表現を抽出した。表5は、シソーラス「高齢者看護」を持つ論文と持たない論文の特徴表現上位10位（持たない論文は10位以下が複数であったため上位9位まで）を示す。「高齢者看護」を持つ論文では、「身体抑制（拘束）－認識・意識」、「身体抑制（拘束）廃止（又は廃止）－試みる」および「患者－看護」などの組み合わせが特徴表現として抽出された。これらの原文（表題）を確認すると、「身体抑制（拘束）－認識・意識」では、「一般病院で高齢者患者に実施されている身体拘束に対する看護師の意識（松原・松波、2019）」、「身体抑制（拘束）廃止（又は廃止）－試みる」では、「抑制廃止を試みて：しばらくしないで！はずして（那覇他、2001）」、「患者－看護」では、「術後せん妄リスクの高い患者への看護：身体損傷を予防した看護（清野、2014）」などがあった。

表1. 年代別論文数（n = 999）

掲載年代	数 (%)
－1987 年	35 (3.5)
1988 年－1991 年	43 (4.3)
1992 年－1995 年	35 (3.5)
1996 年－1999 年	33 (3.3)
2000 年－2003 年	132 (13.2)
2004 年－2007 年	199 (19.9)
2008 年－2011 年	128 (12.8)
2012 年－2015 年	187 (18.7)
2016 年－	207 (20.7)

表 2. 雑誌別掲載数 (n = 999)

掲載雑誌名	数
日本精神科看護学会誌	103
日本精神科看護学会誌	92
日本看護学会論文集：看護総合	30
川崎市立川崎病院事例研究集録	29
精神看護	25
小児看護	24
川崎市立川崎病院看護研究集録	18
中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌	18
看護技術	15
沖縄県看護研究学会集録	10
日本看護学会論文集：看護管理	13
日本看護学会論文集：成人看護	17
日本看護学会論文集：老年看護	14
その他 (10 件未満)	591

表 3. 第 1 著者の所属施設 (n = 999)

所属施設	数
臨床看護師	814 (81.5%)
病院	804
クリニック	2
福祉施設	8
大学・短期大学	152 (15.2%)
大学	124
短期大学	23
博士課程	3
修士課程	2
看護師養成機関	17 (1.7%)
専門学校	10
大学校	7
その他	16 (1.6%)
研究所・研究センター	5
教育センター	4
看護協会	2
その他	5

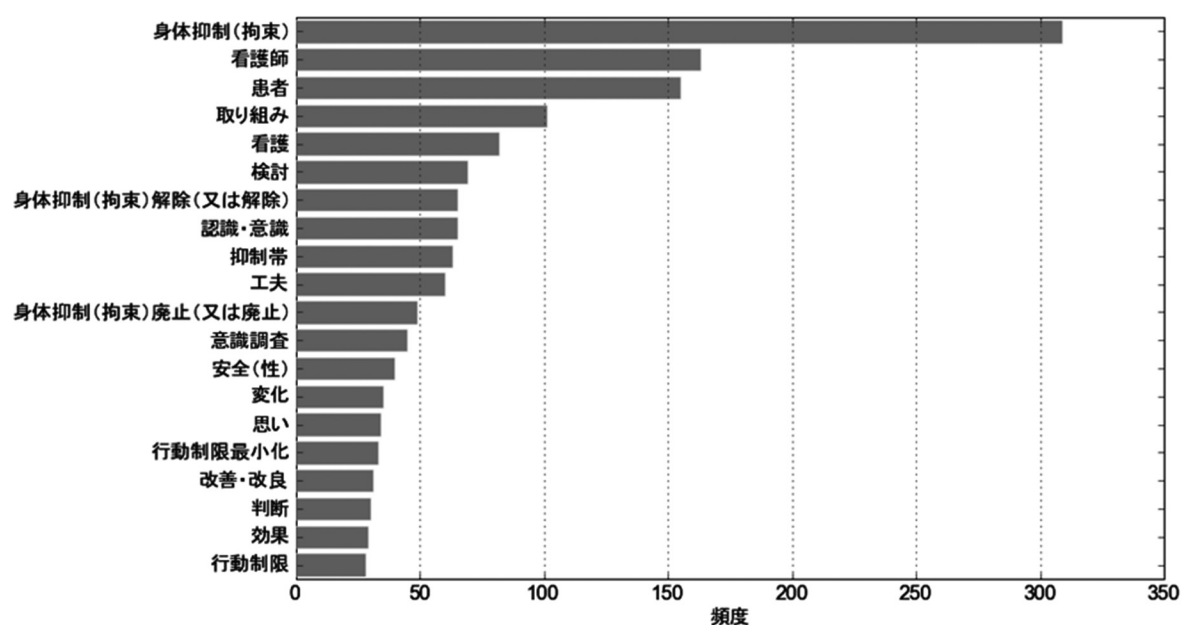


図 1. 論文表題に頻出していた単語 (20位まで)

表 4. 論文表題における年代別の特徴語

1982-1983		1984-1987		1988-1991		1992-1995		1996-1999	
語句	指標値	語句	指標値	語句	指標値	語句	指標値	語句	指標値
体動	37.4	体動抑制	29.0	<u>工夫</u>	62.6	<u>抑制帯</u>	85.7	<u>抑制帯</u>	58.3
身体抑制 ^a	28.6	<u>小児</u>	20.4	<u>抑制帯</u>	52.5	<u>改善・改良</u>	40.1	<u>工夫</u>	29.8
安楽 (性)	28.2	看護	18.7	安全 (性)	43.3	<u>工夫</u>	29.1	<u>改善・改良</u>	29.2
<u>幼児</u>	22.5	患者	16.3	安楽 (性)	38.3	作製	25.8	考案	15.1
援助	20.2	トータル	14.7	看護用具	34.9	<u>小児</u>	25.8	一考察	14.2
看護	20.0	ナーシング	14.5	環境改善アイデア集	31.7	考案	20.5	抑制手袋	11.2
LCC	15.2	アセスメント	13.9	治療時	31.7	採血時	16.2	看護援助	11.0
牽引	15.2	体動	13.7	病院	31.7	一考察	13.9	文献	11.0
<u>抑制帯</u>	14.8	中心	13.7	処置	30.8	患者	11.9	アドバイス	10.9
体動抑制	14.5	<u>子ども</u>	13.5	手術室	13.6	点滴	10.2	抑制基準	10.9

2000-2003		2004-2007		2008-2011		2012-2015		2016-2020	
語句	指標値	語句	指標値	語句	指標値	語句	指標値	語句	指標値
<u>身体抑制廃止^b</u>	53.6	検討	16.5	<u>行動制限</u>	15.1	看護師	28.1	看護師	37.9
身体抑制 ^a	42.8	<u>高齢者</u>	16.5	事例	12.5	取り組み	25.0	取り組み	24.4
看護職 (者)	19.0	<u>身体抑制廃止^b</u>	16.3	看護	11.2	<u>行動制限最小化^c</u>	22.3	<u>身体抑制解除^d</u>	19.1
患者	11.9	実態	12.9	実態調査	11.1	隔離	19.0	思い	18.5
意識調査	11.6	有効性	11.8	看護師	11.1	検討	15.0	<u>認知症患者</u>	17.2
実践	11.2	ジレンマ	11.3	家族	9.7	せん妄	13.6	効果	16.3
試み	9.5	意識調査	10.7	分析	9.5	<u>身体抑制解除^d</u>	11.9	一般病棟	14.1
車椅子乗車時	8.2	行動	9.2	必要	9.0	研究	11.7	<u>高齢患者</u>	13.6
防止	7.9	使用	8.4	意識調査	8.4	精神科病棟	9.1	急性期病棟	12.6
看護	7.4	身体的抑制	8.1	関わり	8.4	患者	9.1	認識・意識	9.4

指標値の高い単語 10 位まで

^a 身体拘束, 抑制, 抑制含む, ^b 身体拘束廃止, 拘束廃止, 抑制廃止を含む, ^c 最小化を含む, ^d 身体拘束解除, 拘束解除, 解除を含む

太字と一重線あるいは二重線: 特徴的に出現していた言葉

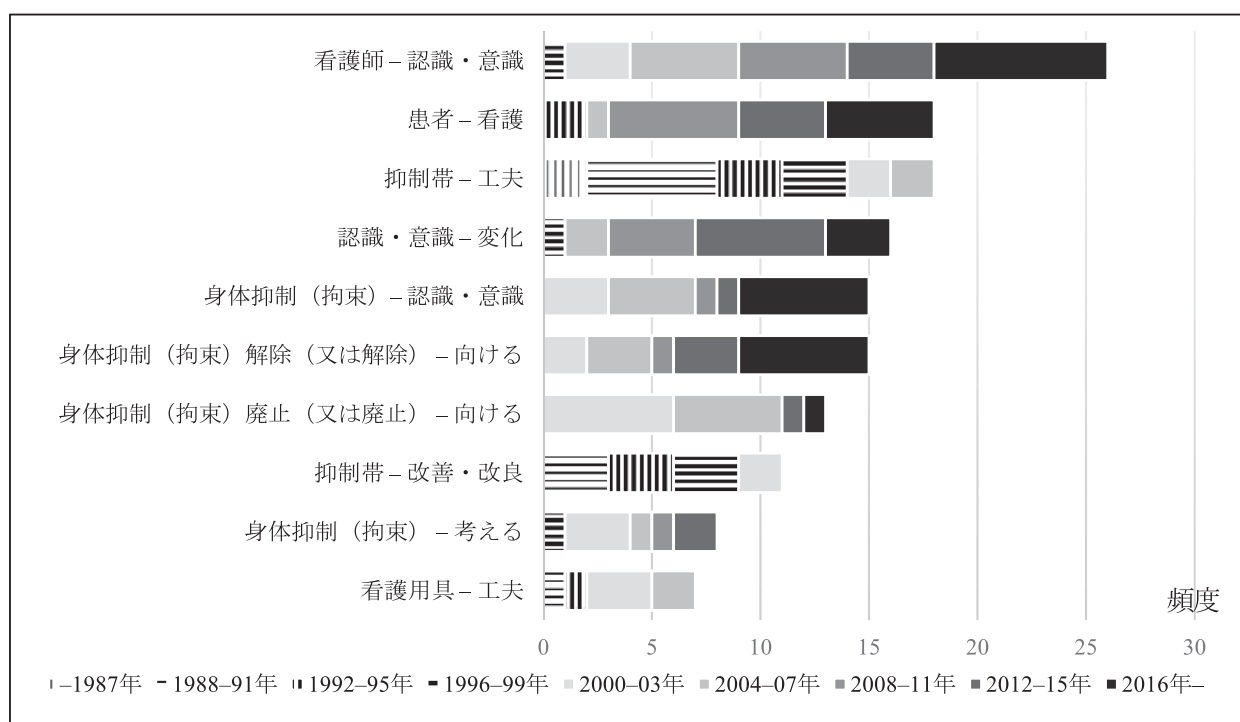


図2. 論文表題における係り受け単語（頻度の多い係り受け単語10位まで）

表5. シソーラス「高齢者看護」持つ論文の論文表題における特徴表現

シソーラス「高齢者看護」を持つ論文表題		シソーラス「高齢者看護」を持たない論文表題	
特徴表現	指標値	特徴表現	指標値
身体抑制（拘束）－認識・意識	12.8	抑制帯－工夫	6.7
身体抑制（拘束）廃止（又は廃止）－試みる	8.1	抑制帯－改善・改良	4.1
患者－看護	7.9	改善・改良－試みる	1.9
身体抑制（拘束）－減らす	7.3	抑制帯－作成	1.9
身体抑制（拘束）－行う	7.3	関わり－振り返る	1.5
取り組み－試みる	5.4	行動最小化－目指す	1.5
尊厳－理解	5.4	身体抑制（拘束）－体験	1.5
実践－アドバイス	5.0	身体抑制（拘束）しない－看護	1.5
身体抑制（拘束）－影響	5.0	抑制帯－考案	1.5
身体抑制（拘束）－変化	5.0		

指標値の高い係り受け単語 10 位まで (シソーラス「高齢者看護」を持たない論文表題は 9 位まで)

IV. 考察

1. わが国における身体抑制の看護研究の動向

身体抑制に関する論文数は、2000年以降急増していた。年代別の特徴語では、1995年までは、「幼児」、「小児」および「子ども」の言葉が抽出されたが、2004年から2007年までは「高齢者」、2016年以降は「高齢患者」および「認知症患者」の言葉が抽出された。論文が急増した2000年は、わが国において介護保険制度が始まった年である。介護保険制度では、身体拘束禁止規定が定められ、2001年に厚生労働省が「身体拘束ゼロへの手引き」(厚生労働省、2001)を出した。また、1998年に福岡市で開かれた介護療養型医療施設の全国研究会にて、「抑制廃止福岡宣言」が発表された。このような、全国的な身体拘束廃止の動きや国の施策が影響し、2000年を境に急激に論文数は増加し、研究対象が幼児や小児から高齢者へ移行したといえる。

係り受け頻度解析の結果より、わが国において看護師の認識や意識、認識や意識の変化に焦点を当てた論文が多かった。また、それらの論文は2000年以降に掲載されていたものがほとんどであった。「身体拘束ゼロへの手引き」(厚生労働省、2001)では、高齢者ケアの場において、身体抑制による患者への弊害を意識しながらもなかなか廃止できないジレンマの中で、患者の安全確保を理由に身体抑制への抵抗感を欠いている現状を指摘している。しかし2016年には、病棟・介護施設等全体で未だ65.9%の機関が身体拘束ゼロを達成していないこと、病院の方が介護施設よりも身体拘束が行われている患者割合が大きいことが報告されている(公益社団法人全日本病院学会、2016)。このように、病院において身体拘束ゼロの達成は難しい状況が継続していることが、看護師の認識や意識、認識や意識の変化に焦点を当てた論文の多さを表すとともに、一概に「廃止」へ移行できないジレンマが続いていることを表しているといえる。

この現場のジレンマに対し、日本看護倫理学会

「身体拘束予防ガイドライン」(2015)では、倫理的感性や行動力を組織文化として定着する必要性を示しており、その推進にはトップのコミットメントが必須であるとのべている。また、先行研究では(志自岐他、2004)、抑制廃止に関する教育の必要性を示している。看護師の認識や意識の変化に焦点を当てた論文をみると、一般病棟(倉田他、2014)や認知症治療病棟(竹内他、2020)にてアクションリサーチを行い、教育的に働きかけ、病棟看護師組織の意識変化を目指そうとしていた。今後、病院での身体抑制減少に向けて、病院看護部の意識転換や、病棟看護師組織の意識・認識の変化に向けた介入と成果の研究を積み重ねるべきであろう。

2. 高齢入院患者に対する身体抑制解除に向けた研究の必要性

係り受け頻度解析の結果を年代別に着目すると、2000年までは、抑制帯の改良・改善や工夫に焦点を当てた論文が多かった。2000年以降、看護師の認識や意識に焦点を当てた論文に加え、身体抑制廃止に向けた取り組みに焦点を当てた論文が多かった。2000年以前は、援助の1つとして身体抑制が行われていた背景があったといえる。そして、2000年以降、国レベルの身体抑制廃止の動きに合わせ、それぞれの病院や施設にて身体抑制をなくす取り組みがされてきたといえる。

一方、図2のグラフより、2012年からは身体抑制の「廃止」から「解除」という表現に移行しているのがわかる。日本看護倫理学会「身体拘束予防ガイドライン」(2015)には、「臨床現場では対象者の安全確保を目的に『せざるを得ない状況』を優先する事例も少なくない」とし、身体拘束の解除基準と解除に向けた方法が提示されている。病院においては一気に廃止をめざすことより、行った抑制を「解除する」取り組みから始めることが切実かつ現実的といえるだろう。さらに、『せざるを得ない状況』の背景にはせん妄症状が潜んでいる場合が多いとし、特に高齢患者へのせん妄

の早期発見・早期対応の重要性を示している。しかし、医中誌シソーラス「高齢者看護」を持つ論文の特徴語分析では、「身体抑制（拘束）廃止（又は廃止）－試みる」の指標値は高いが、「身体抑制（拘束）解除（又は解除）－試みる」は特徴語として上位に抽出されなかった。2016年の診療報酬改定での認知症ケア加算の新設、2018年の診療報酬改定での夜間看護加算や急性期看護補助体制加算の要件として、「日頃より身体拘束を必要としない状態となるよう環境を整えること」が明記された。このことから、今後、入院している高齢患者や認知症患者に対し、行った身体抑制の早期の解除に向けた研究をまず積み重ねていくべきであろう。

V. 研究の限界

本研究では、論文表題のみを対象としたため、論文内容の詳細の分析までは至っていないことが限界である。しかし、日本の身体抑制に関する看護研究における、年次的動向は明らかにできた。今後、論文内容を詳細に分析し、意識・認識の変化に向けた介入と成果の研究および「高齢患者」および「認知症患者」に対する早期の抑制解除に向けた研究の知見を統合し、抑制介助の介入研究を模索していく。

VI. 結論

日本における身体抑制の看護研究の動向は、以下2つである。

1. 全国的な身体拘束廃止の動きや国の施策が影響し、日本における身体抑制の看護論文は、2000年を境として急激に論文数は増加し、研究対象が幼児や小児から高齢者へ移行した。
 2. 2000年までは、抑制帯の改良・改善や工夫に焦点を当てた論文が多かった。2000年以降、看護師の認識や意識に焦点を当てた論文に加え、身体抑制を廃止あるいは解除に向けた取り組みに焦点を当てた論文が多かった。
- 今後、身体抑制に対する病院看護師の意識・認

識の変化に向けた介入と成果の研究や、高齢患者や認知症患者に対する早期の抑制解除に向けた研究を積み重ねていくことが必要である。

謝辞

本研究は、2019～2022年度JSPS科学研究費補助金（基盤研究C：課題番号、19K11279、研究代表者、竹崎久美子）の助成を受けて実施した。

利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反事項はない。

参考文献

- 江口牧子、岩波典子、田崎祐子他（1990）：抑制帯装着患者の看護 患者の安全の確保と苦痛の除去をめざす抑制帯の工夫、旭川市立病院医誌、22(1)、74-78
- 藤井美和、小杉考司、李政元（2005）：福祉・心理・看護のテキストマイニング入門、中央法規出版
- 樋口耕一（2014）：社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版
- 一般社団法人日本看護倫理学会（2015年6月）：身体拘束予防ガイドライン、一般社団法人日本看護倫理学会、http://jnea.net/pdf/guideline_shintai_2015.pdf（参照日：2020年11月8日）
- 一般社団法人日本集中医療学会看護部会（2010年12月）：ICUにおける身体拘束（抑制）のガイドライン、一般社団法人日本集中医療学会 https://www.jsicm.org/pdf/gl-shintai-kosoku_201012.pdf（参照日：2020年11月8日）
- 清野詩織（2014）：術後せん妄リスクの高い患者への看護：身体損傷を予防した看護、川崎市立川崎病院事例研究集録、16回、37-39
- 公益社団法人全日本病院協会（2016年3月）：身体拘束ゼロの実践に伴う課題に関する調査研究事業報告書、全日本病院協会、https://www.ajha.or.jp/voice/pdf/other/160408_2.pdf（参

- 照日：2020年11月8日)
- 厚生労働省「身体拘束ゼロ作戦推進会議」(2001年3月)：身体拘束ゼロへの手引き～高齢者ケアに関わるすべての人に～、厚生労働省
<http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryou/no.13/data/shiryou/syakaifukushi/854.pdf> (参照日：2020年11月8日)
- 倉田貞美、牧野公美子、村上静子、他(2014)：一般病院における認知症高齢者への不必要な身体拘束防止の取り組み：看護師の認識および身体拘束実施状況の変化に関する量的検討、日本認知症ケア学会誌、12(4)、763-772
- 李慧瑛、下高原理恵、深田あきみ、他(2017)：論文表題におけるがん看護研究と対がん政策との関連：テキストマイニングを用いた過去46年間の時代的変遷の分析、日本看護医療学会雑誌、19(2)、60-71
- 松原薫、松波美紀(2019)：一般病院で高齢者患者に実施されている身体拘束に対する看護師の意識、大垣女子短期大学紀要(60)、71-84
- 松井美帆(2014)：医療施設における身体拘束に対する看護師の認識と廃止へ向けた取り組み、高齢者虐待防止研究、10(1)、121-128
- 那覇直、山口美那子、久場幸代、他(2001)：抑制廃止を試みて：しばらくしないで！はずして、日本精神科看護学会誌、44(1)、152-155
- 中村智美、佐藤淳、川合智子、他(2018)：身体抑制解除に向けた取り組み：リハビリテーション科とのカンファレンス導入の効果、沖縄県看護研究学会集録、32回、68-70
- 大木秀一(2013)：文献レビューのきほん：看護研究・看護実践の質を高める、医師薬出版
- 瀬尾好美、中田美代子、林ナツノ、他(1994)：不穏状態の患者に用いる抑制帯の改良：装着容易な分離型抑制帯を作製して、日本看護学会集録、25回(成人看護1)、133-135
- 志自岐康子、城生弘美、恵美須文枝、他(2004)：抑制しない看護を可能にした要因：高齢者施設の場合、日本看護管理学会誌、8(1)、5-13
- 竹内陽子、遠田大輔、岡田幸子、他(2020)：認知症者の身体拘束に対する看護師の意識：アクションリサーチによる意識変革の過程、日本精神科看護学術集会誌、61(2)、132-136
- 特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会(2020年3月)：医中誌Web、Ver5、特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会、https://www.jamas.or.jp/service/ichu/pdf/ichushiweb_pamphlet-20200301.pdf (参照：2020年11月8日)
- 特定非営利活動法人全国抑制廃止研究会(2008年3月)：身体拘束廃止のための標準ケアマニュアル、特定非営利活動法人全国抑制廃止研究会、<http://www.yokuseihaishi.org/index.php?%E8%B3%87%E6%96%99%E9%9B%86> (参照日：2020年11月8日)
- 友永あみ、吉本未智恵(2019)：当院病棟勤務看護師の身体拘束・抑制の認識について、神戸百年記念病院誌(31)、85-90
- 友竹千恵、浅井さおり、内山孝子、他(2017)：臨床倫理ガイドライン導入の取り組み：看護管理者の取り組みと看護管理者・チームの認識や行動の変化、日本看護倫理学会誌、9(1)、22-30